

とまと作りで培養液安定をねらいに「さか」から「えむ」に改造!

今号は、とまと栽培における、さか(NFT方式)から、えむ(DFT方式)に改造を実施された事例の報告です。三重県長島町の金森甲造さんは、1360坪のハウスで水耕による大玉とまとを栽培されています。当初は土耕による施設栽培だったそうですが、土壌病害対策の手間、土作り、たい肥作りなどの作業から解放されたいと18年前弊社果菜プラント「さか」による水耕方式に置換され、現在に至っています。年2作型で夏作が7~8段、春作が14段で運営されていますが、PHが変動し結果として後半樹が負ける、段数が伸びないなどの問題解決のために培養液量を増大させ、栽培安定をさせたいと考えておられ、一昨年8月号M式たよりNO33で紹介した新設トマトプラント方式に興味を持たれ、この方式に改造を決意された

ものです。この度改造工事も完了し、1作目の定植を8月に終わられ10月始めからの収穫の予定です。

今回の改造工事は、従来の資材はできるだけ活用し、栽培ベットの「さか」から「えむ」に変更、ベット水位調整培養液槽の新設だけで生まれ変わった施設になりました。えむベットへの変更で培養液量は増加し、PHの安定度向上、水位調整水槽によるベット水位調整の簡略化、ベット内水流の停滞がなく、根圏部の表面境界層の発生減少、結果として根圏酸素吸収能力改善による生育活性化などの効果を期待されています。先ほどのM式たよりNO33の事例でも、納入後2年を経過し、湛液ベットとベット内連続注水(連続フロー方式)の効果は立証されており、この様子を評価されたわけで

す。金森さんは、トマト一筋30年の栽培のプロですが、プロが選んだトマトプラントと言えるのではないでしょうか。夏場の殺虫剤使用はやむを得ないが、殺菌剤使用はやっていないとのこと、改造時に

「撃退くん」(黄色蛍光灯)やバグスキャンも導入し、安全なとまと作り、病気虫対策へも配慮されています。

今回の改造で、管理手間の削減以外にも、後半の玉伸びが改善できるであろうし、収量改善にもつながりたいと明るい顔で語っていただきました。単価安が農家経営を圧迫している現状ですが、これからのご発展をお祈りするとともに、その後の状況など、機会をみつめて紹介を考えたいと思っています。(担当 鬼頭史一)



改造後えむベット



一部残っているさかベット



金森さん



撃退くん